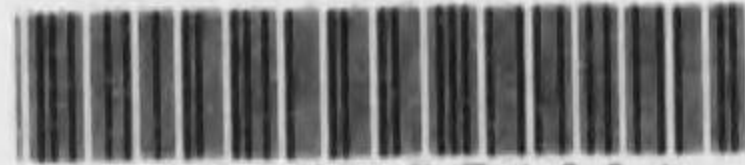
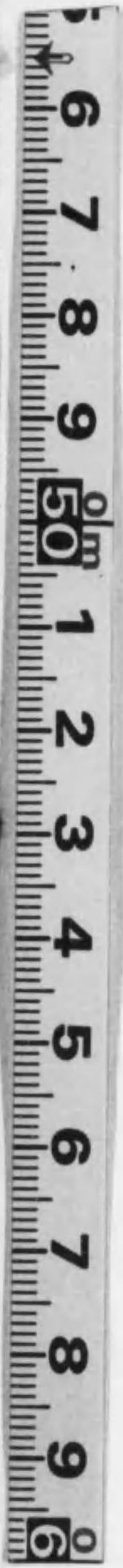


911.56  
Ta45

911.56-Ta45-87  
  
1200500756886



始



209 ✓



911.56  
TA45  
8

398

詩集  
記

錄

高村光太郎



記  
錄

094  
18

### 序

龍星閣主人澤田伊四郎氏から慫慂せられて又この詩集を編んだ。大東亞戦争以後に作つた時局に關する詩ばかりの集結である。ここに収録したもの以外にもさういふ詩はあるが前著「大いなる日に」其他に編入せられてゐるものは重複を避けてこの集に入れなかつた。ただ大戦勃發前後の詩とシンガポール陥落の時の詩とで、どうしても除外しがたいものが二三篇あり、これらは重複を厭はず已むを得ず入れた。大戦の由來は遠く且つ深い。恐らくペルリ來航の時すでにその運命は萌してゐたと見るべきであらう。この集に序篇として大正年代以來の詩を若干入れたのも、或る雰圍氣の必至の勢を暗示するよすがとせしめたい心からであつた。

「記録」といふ題名は澤田氏が撰び、私が同意したものである。むろん全記

録の意味ではない。いはば大東亞戦争の進展に即して起つた一箇の人間の抑へがたい感動の記録といふ方がいかもしれない。もつと内面に屬する詩であるため、この集に収録せられないばかりか、まだ一度も發表せられてゐない詩がたくさんある。さういふ生活内面に關する詩は現下の發表機關の絶えて要求しないところであるから、それも當然である。物資勞力共に不足の時無理な事は決して爲たくない。この詩集とても果して必ず出版せられるかどうかは測りたい。それほど戦はいま烈しいのである。二年前の大詔奉戴の日を思ひ、今のやうに詩集など編んでゐられることのありがたさを身にしみて感ずる。戦局甚だ重大、あの時の決意を更に強く更に新たにしていただ前進するのみである。

昭和十八年十二月八日

高村光太郎

序 篇

目 次

白 熊……………九

象の銀行……………一三

北東の風、雨……………一五

のんきな會話……………一七

非歐米的なる……………一九

秋風をおもふ……………二二

未曾有の時……………二三

新しき御慶……………二六

紀元二千六百年……………二八

重大なる新年……………三〇

新年に與ふ……………三三

危急の日に……………三四

主 篇

大詔渙發……………五  
 彼等を撃つ……………三九  
 夜を寝ねざりし曉に書く……………四〇  
 特別攻撃隊の方々に……………四八  
 或る講演會で讀んだ言葉……………五二  
 獨居自炊……………五七  
 帝都初空襲……………五九  
 戦没報道戦士にささぐ……………六三  
 民國の民と兵とに與ふ……………六五  
 眞珠港特別攻撃隊……………六八  
 感激をかくさず……………七五  
 神とともにあり……………七八  
 新天地……………八一  
 覆滅彼にあり……………八四

われらの道……………八七  
 戦にきよめらる……………九〇  
 決戦の年に志を述ぶ……………九三  
 殄滅せんのみ……………九六  
 紀元節を迎ふ……………九九  
 「撃ちてし止まむ」……………一〇三  
 あそこで斃れた友に……………一〇六  
 海軍魂を詠ず……………一〇九  
 軍人精神……………一一三  
 突端に立つ……………一二五  
 嚴然たる海軍記念日……………一二九  
 五月二十九日のこと……………一三三  
 山本元帥國葬……………一三七  
 報道の士をたたふ……………一三一  
 われらの死生……………一三四  
 ビルマ獨立……………一三八

友來る……………	一四三
おん魂來りうけよ……………	一四七
勤勞報國……………	一五〇
肅然たる天兵……………	一五三
救世觀音を刻む人……………	一五六
フィリッピン共和國獨立……………	一六〇
四人の學生……………	一六七
全學徒起つ……………	一七一
戰に徹す……………	一七五
斷じてかへさず……………	一八一
激戰未だ終らず……………	一八四
大決戰の日に入る……………	一八七
第五次ブーゲンビル島沖航空戰……………	一九〇
十二月八日三たび來る……………	一九三

## 白 熊

大正十四年一月作。明治三十九年筆者はアメリカ紐育市に苦學してゐた。日露戰爭の後なので數年前の排日運動の烈しい氣勢はなかつたが、われわれが仲裁して面目を立ててやつたのだといふやうな顔には絶えず出會つた。紐育市郊外ブロンクス公園が筆者の唯一の慰安所であつた。動物は決して「ハロージャップ」といはなかつた。

ザラメのやうな雪の残つてゐる吹きさらしのブロンクス公園に、  
彼はジャップらしい啞のやうな顔をして  
せつかくの日曜を白熊の檻の前に立つてゐる。

白熊も黙つて時々彼を見る。

白熊といふ奴はのろのろしてゐるかと思ふと

飄として飛び身をふるはして氷を碎き水をあびる。



岩で出来た洞穴に鋭いつららがさがり  
そいつがブリズム色にひかつて

彼の頭に忿怒に似た爽快な旋律を絶えず奏でる。

七弗の給料から部屋代を拂つてしまつて

鷺のついた音のする金が少しばかりポケットに残つてゐる。  
彼はポケットに手を入れたまま黙りこくつて立つてゐる。

二匹の大きな白熊は水から出て

北極の地平を思はせる一文字の背中に波うたせながら  
音もさせずに凍つたコンクリートの上を歩きまはる。

真正直な平たい額とうすくれなるの唇と、

すばらしい腕力を匿した白皚々の四肢胴體と、  
さうして小さな異邦人的な燐火の眼と。

彼は柵にもたれて寒風に耳をうたれ、

蕭條たる魂の氷原に

故しらぬたのしい壯烈の心を燃やす。

白熊といふ奴はつひに人に馴れず、

内に凄じい本能の十字架を負はされて

紐育の郊外にひとり北洋の息吹をふく。

教養主義的温情のいやしきは彼の周圍にみちる。

息のつまる程ありがたい基督教的唯物主義は

夢みる者なる一ジャップを殺さうとする。

白熊も黙つて時々彼を見る。

一週間目にはじめてオーライの聲をきかず、

彼も沈黙に洗はれて龐大な白熊の前に立ちつくす。

## 象の銀行

大正十五年二月作。明治三十九年夏から冬筆者は紐育市西六五丁目一五〇番にある家の窓の無い天井裏の小さな部屋に住んでゐた。光線は天井の引窓から来た。市の中央公園が近いのでよく足を運んだ。そこには美術館もあつた。小さな氣のきいた動物園もあつた。埃及から買取つたオベリスクも立つてゐた。みな金のにほひがしてゐた。

中央公園セントラルパークの動物園のとぼけた象は

みんなの投げてやる銅貨カバネや白銅ニッケルを

並外れて大きな鼻づらでうまく拾つては

上の方にある象の銀行エリファントバンクにちやりんと入れる。

時々赤い眼を動かしては鼻をつき出し、

彼等のいふ此のジャップに白銅をくれといふ。

象がさういふ。

さういはれるのが嬉しくて白銅を又投げる。

印度産のとぼけた象、

日本産のさびしい青年。

群集なる彼等を見るがいい、

どうしてこんな二人の仲が好過ぎるかを。

夕日を浴びて中央公園を歩いて来ると、

ナイル河から来たオベリスクが俺を見る。

ああ、憤る者がここにも居る。

天井裏の部屋に歸つて彼等のジャップは血に鞭うつのだ。

## 北東の風、雨

昭和二年九月作。大正の末から昭和へかけての社會一般の不安状態は戦慄に値するものがあつた。アメリカ主義の利潤追求熱と、ソ聯マルクス主義の階級意識とが日本朝野の間に烈しい攻勢をとつて浸潤して来た。「資本論」の定譯が普及せられ、一方、芥川龍之介全集の刊行が着手せられたのも此年である。

軍艦をならべたやうな

日本列島の地圖の上に、

見たまへ、陣風線の輪がくづれて

たうとう秋がやつてきたのだ。

北東の風、雨の中を、

大の字なりに濡れてゐるのは誰だ。

愚劣な夏の生活を

思ひ存分洗つてくれと、

冷々する砲身に跨つて天を見るのは誰だ。

右舷左舷にどどんとうつ波は

そろそろ荒つぽく、たのもしく、

どうせ一しけおいでなさいと

そんなにきれいな口笛を吹くのは誰だ。

事件の豫望に心はくゆる。

ウエルカム、秋。

### のんきな會話

昭和五年三月作。社會不安に加ふるに國際不安も亦甚しかった。さきには不戰條約などといふものが巴里で締結せられたり、此年にはあの重要な意味を其後の年月に持つ倫敦海軍會議が開かれたりした。しかも社會生活の表面はますます華美となり、外貨獲得の爲に觀光客誘引は獎勵せられ、一般世人の所謂モダン化は凄じい勢を呈した。

北半球に春が來た。

實に天下太平だ。

喧嘩は止さうと相談中だ。

東京にサクラが咲いて

觀光團の札が降る。

ムスメの脚が長くなる。

實に天下太平だ。

——さうだ相だ。

### 非歐米的なる

昭和七年三月作。世界的經濟恐慌の渦巻の中で、つひに滿洲事變は一年前に突發し、或る重大な國內事件も此年に起つた。滿洲事變を問題として國際聯盟は日本を被告扱ひにし、英米の政治家は日本を不當に抑へようとした。英米は一切の野望を支那に對する平和維持の爲といふ口實のもとに遂げようとしたのである。

力は力を無視する。

素朴な燃燒體太陽はただ燃える。

——春は何處から來る。

——春は春の方から來る。

——春はいつ來る。

——春は春になると來る。

愛は愛を無視する。

愛の辭典をもう持たないアジャ的なる愛の深淵。

——今日は寒い。

——さうね。

——お仕事は。

——なかなか。

ふみ超えてゆくのは戦友の屍に限らない。

### 秋風をおもふ

昭和十年八月作。昭和九年の倫敦軍縮豫備交渉は休會流れとなつた。まさに來らんとするものを強く豫感して、これに期待する心とこれを憂慮する心とが世人を昏迷せしめた事も事實である。英米のわれをめぐる壓迫と、かねて國情を誤り認めて機を見てわれを挫かんとする鋒芒とは漸く顯著となつた。昭和十一年には所謂二・二六事件が起つた。

ああ汗くさいじとじとの夏の重壓をふりきるためなら

よし二六ミリの大傾斜でもおいでなさい。

日本列島を縦にざぶざぶ洗つてください。

洗ふものを洗つてしまへば、

たとへ飛びちるものは飛び散つても

きれいな明るいセロファン風の秋の風が

その時遠い天上から逆しまに落ちて來て、

さつと人間の生きた肺を吹きぬくでせう。

放たれた萬物が急に眼をあくでせう。

白雲も飛ばう菊も芳かほらう蘭も秀はなかう。

私はいま口もきけない暑くるしい八月の部屋に閉ちこめられて

サイパンあたりの渦流氣層を夢みながら

小さなバロメーターの針を見つめるばかりだ。

## 未曾有の時

昭和十三年正月發表。昭和十二年七月七日つひに盧溝橋事件が勃發した。北支事件は支那事變に擴大され、日本は英米といふうるさい大きな力に遠慮しながら不利な戦を戦ひ、しかも抗日支那の夢を破らんとして甚大な戦果をあげた。未だ戦になれざる國民の間にも報國の熱意は烈しく、困苦に對する覺悟も出來さうになつた。

未曾有の時は沈黙のうちに迫る。

一切をかけて死んで生きる時だ。

さういふ時がもう其處に來てゐる。

迫り來るものは假借せず

悠久の物理に無益の表情はない。

わが事なほ中道にあり、

世の富未だ必ずしも餓莩を絶つに至らず、

人みな食へないままに食ひ  
一寸先きの闇を衝いて生きる日  
枚を衝んで迫り来るものは四邊に満ちる。  
既に余が彫蟲の技は余を養はず、  
心をととのへて獨り坐れば  
又年が暮れて曆日はあらためられる。  
巷に子供ら聲をあげて遊びたはむれ、  
冬の日は穩かにあたたかく霜をくづし  
紫陽花の葉は凋み垂れて風雅の陣を張り、  
山雀は今年もチチと鳴いて窓を覗きこむ。  
すべて人事を超えて窮まる處を知らない。  
さればしづかに強くその時を邀へよう。  
一切の始末を終へて平然と來るを待たう。

悉く傾けつくして裸とならう。  
おもむろに迫る未曾有の時  
むしろあの冬空の透徹の美に身を洗はう。  
清らかに起たう。



## 新しき御慶

昭和十四年正月發表。昭和十二年、十三年は國家内外の情勢多事多端、肅軍のあとをうけて内閣は頻に更迭し、近衛内閣の時支那事變勃發、その處理のため多くの努力が拂はれた。しかし支那事變はその背後にあるものの處理がつかない限り如何ともし難い眞相を露呈して來て人は心に重壓を感じた。歐洲では此年九月第二次大戰が起つた。

東アジヤの緯度と經度に

この新しい年がひつさげるもの

氷のやうに肌にあふれ

鞭のやうに宇宙に鳴るもの、

幾千年の生理と心理とに火づくりして

正中黄色の道を鍛へるもの、

むしろためし無き困難に一切をかけて

ためしなき天の經綸を布ぶるもの、  
かかるもの朝の空氣に漲り、  
井戸の若水、三寶の屠蘇、  
雑煮の餅の匂まで、  
しんとするほど改まつた

正月以上のお正月だ。

この正月死も亦語るべし。

さかんなる死と犠牲とは全地を彩る。

死をいつでもそこに置いて

敢然として拜賀するお正月だ。

## 紀元二千六百年

昭和十五年正月發表。此年恰も紀元二千六百年の年紀にあたる。國家未曾有の難局四邊に重疊する時此の意味深き年を迎へて、期せずして國民ひとしく悠遠の古しへに思を馳せ、萬邦に比なきわが國體の尊嚴に心を躍らせぬはなかつた。此年十一月十日 天皇皇后兩陛下親臨あらせられて嚴肅なる奉祝の式典が宮城外苑に於て舉行せられた。

われら民族の肉と血と魂とには

今と昔の分ちが無い。

二千六百年の昔は神代につながる古にして

しかも昨日のやうにわれらに近い。

神倭伊波禮毘古命われら一群に向はせられ、

八紘を掩ひて宇とせんとのたまひて、

橿原宮に天つ日嗣しろしめし給うた様が

今ありありと眼に見える。

まつりごとを平らげくきこしめし、

正しきを養はんとは

萬古を貫くおほん聲におはす。

歴史は起伏轉變し、

心よこしまの君側、時にあらはれたが、

われら民族親子のむつびはいよよ濃かに、

二千六百年の後なるわれら、

神武の帝を高く仰いで今をかへりみ、

おほらかに、つよく、あきらけく、

人類根源の美と光とを此世に樹てよう。

治く此世を淨める天の息吹と吾等はならう。

## 重大なる新年

昭和十五年正月發表。内外情勢の逼迫いよいよ甚し。此年六月十七日佛つひに獨に降服。國內では所謂七七禁令が實施された。九月日獨伊三國同盟成立し爾來樞軸反樞軸の對立がはつきりした。十月大政翼賛會の發會を見、十二月臨時中央協力會議が開かれた。日蘭會談は徒に遷延せられ、日米外交上の諸問題は三選大統領の下に益硬化した。

再び値ひがたい新年に値ふのだ。

歴史の回歸はここに遠く圓を描き、

まざまざと昔を今にまのあたり

もう一度われらは日を負つて戦ふ。

遠つ祖の戦のあとをつぶさに見れば

言葉につきせぬ苦戦の連続。

長髓彦の痛矢串にはばまれ、

熊野の熊の毒氣になやまされ、

陸に海にいのちあやふく厄められ、

幾たびか雄たけびし

幾たびか薑の口ひびく思を忍びたまうた。

ああ大業は易からず、

アジャの自立を妨ぐるもの、

今も尙ほ鳥見彦の類族絶えず、

困難は松なく竹なき新年と共に迫る。

重大なる此の新年のいさぎよさよ。

われらは草を嚼む事をむしろ望まう。

成すべきは必ず遂げて

畏くも遠つ祖に應へ奉るため。

## 新年に與ふ

昭和十六年正月發表。一月「戰陣訓」出づ。既に野村大使來栖大使米國に在りて日米交渉に最善の力を盡せど米國側に誠意なし。七月御前會議開かる。八月米國は對日石油禁輸強化を發表。所謂A B C D包圍鐵環を叫び、經濟斷交に及び、十一月二十六日最後の意思表示のノートをわが方に示す。わが方の完全屈從を意味するノートであつた。

南太平洋の飛石がベトンに固められ、  
北太平洋の冰山圈にアンテナが立ち並び、  
さうして日附變更線の向うから  
物珍しい顔をした新年が来る。  
少しやんちゃなやうな、  
なかなか駆引のありさうな、  
火いたづらの好きなやうな嫌ひなやうな、

轉んでもただは起きない、  
金にものを言はせようとする、  
さういふ一種愉快な新年が来る。  
今年は何松こそあんまりないが  
大にこの新年を歓迎しよう。  
われわれ民族の眞意を見てもらはう。  
話せば分かるものならば  
肚を割つて談じも爲よう。  
われわれ民族は平和を好むが、  
民族の使命だけは斷じてまげない。  
日附變更線の向うから来る  
物珍しい顔をした新年よ、  
今年は何の頭腦の試金石だ。

## 危急の日に

昭和十六年十二月四日作。十月東條内閣成立。此年の息づまるやうな空気が國民をして最後の覺悟を固めしめた。當時日米交渉の委曲は一般に公表せられなかつたので、國民これを知る由もなかつたが、漠然たる、しかも確然たる豫感天と地とに満ちてゐた。此の詩は圖らず開戦直前に成り、十二月八日の讀賣新聞夕刊紙上に發表せられた。

「本日天氣晴朗なれども波高し」と

あの小さな三笠艦がかつて報じた。

波大いに高からんとするはいづくぞ。

いま神明の氣はわれらの天と地とに満ちる。

われは義と生命とに立ち、

かれは利に立つ。

われは義を護るといひ、



かれは利の侵略といふ。

出る杭を打たんとするは彼にして

東亞の大家族をつくらんとするは我なり。

自色の者何するものぞと

彼の内心は叫ぶ。

自色の者いまだ悉く目さめず、

憚むべし、彼の願使に甘んじて

共に我を窮地に追はんとす。

力を用ゐるはわれの悲しみなり。

悲憤嗚へがたくして

いま神明の氣はわれらの天と地とに満ちる。

## 大詔 渙 發

昭和十六年十二月八日作。此日の感激は昭和に生きた日本人たるものの終生忘れ難いところであらう。此日恰も第二回中央協力會議の第一日目にあたり、筆者も各界代表の一人として末席に列り、詔書の捧讀を聴いて恐懼に堪へず、座席に釘づけとなつたまま、此詩を卓上の紙片に書いた。會議の宣言決議文は宮城前にて朗讀せられた。

棒立ちになつた議長は僅に口を動かして

午後一時までの開會延期を宣した

「それまで静かにお待ち願ひたい」と

ゆつくりしづかに議長がのべる。

議場はもうささとつた。

重大な決意が千餘名をしんとさせた。

歴史的な時間は分秒に音なく、

午前十一時四十五分、

ラジオは宣戦布告を報じた。

午後一時、

恭しく捧げられた詔書が議場に入る。

議長は少しふるふる手でこれを展げる。

大詔を拜して議場に箇々の人影なく、

ただ肅然たる一團の魂があつた。

開會の式は順を逐ふ。

宣言決議の案文を待つ時

議場はたちまち熱氣に満ちて猛然たり。

則ち我は此記念の席に坐して此詩を書く。

### 彼等を撃つ

昭和十六年十二月十五日作。宣戦の布告と共に軍の敏速なる行動により、ハワイ眞珠港攻撃マライ敵前上陸、英國大戦艦撃沈等の大戦果あり。國民は初めて窒息的雰圍氣から解放せられて頓に生氣蘇る。此詩は十二月二十四日大政翼賛會にて開催せられた文學者愛國大會の席上、筆者自ら朗讀した。此大會は日本文學報國會の結成を促した。

大詔おほみことりひとたび出でて天つ日のごとし。

見よ、一億の民おもて輝きこころ躍る。

雲破れて路ひらけ、

萬里のきはみ眼前まなかひにあり。

大敵の所在あはつひに發かれ、

わが向ふところ今や決然として定まる。

間髪を容れず、

一撃すでに敵の心肝を寒くせり。

八十梟帥たけらのとも遠大の野望に燃え

その鐵の牙と爪とを東亞に立てて

われを圍むこと二世紀に及ぶ。

力は彼等の自らたのむところにして

利は彼等の搾取して飽くところなきもの。

理不盡の言ひがかりに

東亞の國々ほとんど皆滅され、

宗教と思想との摩訶不思議に

東亞の民概ね骨を抜かる。

わづかにわれら明津御神あきつみかみの御稜威により、

東亞の先端に位して

代々幾千年の練磨れんまを経たり。

わが力いま彼等の力を撃つ。

必勝の軍なり。

必死必殺の劍なり。

大義明かにして惑ふなく、

近隣の朋救ふべし。



彼等の鐵の牙と爪とを撃破して  
大東亞本然の生命を示現すること、  
これわれらの誓なり。  
霜を含んで夜しづかに更けたり。  
わが同胞は身を捧げて遠く戦ふ。  
この時卓に倚りて文字をつづり、  
こころ感謝に満ちて無限の思切々たり。

### 夜を寝ねざりし曉に書く

昭和十七年二月十七日朝作。皇軍緒戦の大戦果に引續いて、グアム島ウエーキ島占領、  
ボルネオ上陸、ルソン島ミンダオ島上陸、マライ進攻、海戦數次、十二月廿五日香港陥  
落。昭和十七年一月二日マニラ占領。二月十四日ペレンバンに落下傘部隊奇襲降下。二月  
十五日シンガポールの敵つひに降服。二月十八日第一次戦捷祝賀舉行さる。

あのざッ、ざッといふ音は何だ。  
あの軋々たるとどろきは何だ。  
あの堂々として整然たるひびきは何だ。  
あの止め度もなくつづく遠方の潮騒は何だ。  
眼をつぶると何處からか聞えて來て

あの音が私をとりまく。

シンガポールだ。

皇軍シンガポール入城を耳が想ふのだ。

堂々として整然たるあのひびきの中に

一切の決意と榮光がある。

あの<sup>おほむことり</sup>大詔を承けた感激の日から

奔流の勢で皇軍は巨大な強敵を撃つた。

目まひのするほど廣大な海のきはみ、

おぼえきれない程多い島々と半島とに

練りに練つた作戦の大構想はひろげられた。

まるで盤上の目のやうに

次から次へとあやまりない力が憂然と鳴つた。

ハワイに大艦隊を即刻滅ぼし、

マライ沖に沈まざる巨艦を沈め、

岩とベトンと遠謀深慮の香港を降し、

マニラを<sup>たひら</sup>截げて呂宋の昔にかへし、

今また自然の防壁密林を衝いて、

大陸の突端、搾取の力點、

自ら助くる者にして生活の格闘者と自稱する

強靱大英帝國の世界の足場、  
鐵で固めたシンガポールをみりみり潰した。  
屈服せざる者を屈服させた。

ああ斯くてわれらの瞬く間に

大東亞民族興隆の基地は全面に布石された。

眼をつぶると遠くざッ、ざッといふ音がする。

あれこそ世界に新しい理念を樹てる音だ。

眼をつぶると軋々たる轟がきこえる。

あれこそ英米的考へ方を踏みにじる音だ。

眼をつぶると堂々として整然たる響が聞える。

あれこそ東方の倫理が美を致す音だ。

しづかに暗い東京の雪後の夜はあけて

ただ私の耳にあの潮騒の音がきこえる。

この曉の神々しさよ。

私はまづ身を淨めて國旗を出す。

## 特別攻撃隊の方々に

昭和十七年三月廿二日作。昨年十二月八日ハワイ真珠港攻撃に際して言語に絶した武勳を立てた特別攻撃隊九軍神の感状が此年三月六日發表せられた。偶々昨年十二月廿三日發會せられた日本少國民文化協會の講師として、軍神岩佐直治海軍中佐の故郷前橋市に赴く事となり、感激に堪へず、車中此詩を作りて群馬會館に於て朗讀した。

千萬の言葉も

あなた方の前には無力です。

生死を超えたまことのいのちを

ただ すめらみこと 天皇のおんためにと、

ためしも聞かず、たぐひも知らぬ、

壯烈といふもおろかな企に

おんみづから案を立て、

おんみづから訓練したまひ、

あの日、あの夜、

真珠港の奥ふかく、

遠つ祖かみやもみそなはせ、

世界がおそれ、彼等が誇つた

あの巨大な数々の艦艙を全滅せしめ、

又おんみづからも海の藻屑と果て給うた。

この凜烈の魂の前に

どんな言葉が面はゆからず語られませう。

生きて日常の生活を営むわれら、

ただ言葉なき無限の思にをのくののみです。

言葉なし、言葉なし。

しかし言葉は火薬のやうに火を求める。

求めてわづかに口を出づれば、

空しいかな、口舌に恥あり、

語らんとして語りがたし。

ただわれら猛然としてちかふ。

どんな聖典の教よりもたふとく、

死んで生きる此の民族の傳統を

このまことのいのちの教を身に奉じ、

語りつぎ、いひつぎて、

われらの道此處にありと

子々孫々の末にいたるまでの掟と爲ませう。

外に何がありません。

ただ無言の感謝と無言の決意とがあるのみです。

## 或る講演會で讀んだ言葉

昭和十七年三月廿五日作。大東亞戦争の長期戦たる性格が明瞭になるにつれて日本の次代を負ふべき少國民に對する教育鍛錬の重要さは甚大の關心を世人の間に喚起した。情報局の指導の下に昨年末、皇太子殿下御誕辰を期して社団法人日本少國民文化協會が結成せられたのも此故である。此詩も亦同會主催の或る講演會で朗讀せられた。

大人とは何でせう。

子どもとは何でせう。

大人とは分別のついた大きな子供。

子どもとは大人の分子を残らず持った小さな芽です。

子どもが大人に變るものではありません。

子どものまんま

そのまま機能が出そろつて

それで大人になるのです。

大人は小さな乳呑兒の中にもう居ます。

大人はみんな子どもの面立おもだちそつくりです。

大きな西郷隆盛は

結局小さな吉之助とちがひません。

子ども子どもといつて

別物にするのは止ませう。

大人になつて變るのは

ただ末梢に過ぎません。

子どもはあらゆる本能の巢です。

その變形がいろいろにあらはれます。

想像力は虚言うその形でもあらはれます。

冒険慾はつまみ食ひにさへ形を變へます。

大人は叡智で本能を馴らします。

子どものあらゆる本能が

そのまま明るい智慧に育つため

そのためにだけ大人の叡智が役立ちます。

大人の毎日の實生活こそ

子どもの本能を導きます。

毎日の實生活こそ

その家その國の傳統の在りかです。

父母ちちははの行ひと精神とが

いつのまにか子どもの本能を左右します。

外からの教育はその本能に叡智の眼をあけるだけです。

お父さん、しつかり。

お母さん、おねがひします。

子どもはあなた方から

動かさない性格をきめられます。

みつごの魂が一生を支配します。

大東亞の安危をひきうけた日本は

國民みな一箇の地道な英雄であるべきです。

すなはち子どもも亦同じく

責任を知る一箇の英雄であるべきです。

大人も子供も今はもう甘えることなく、

たじろぐことなく、こじれることなく、

總がかりで

われらの民族の持つ美と力とを

奇蹟のやうに増大すべき日が來たのです。

## 獨居自炊

昭和十七年四月十三日作。かういふ性質の詩集の中へ自己を語る詩を入れるのは憚られるが斯かる時代の一詩人の生活記録として一篇だけ挿ませてもらふ。此は筆者が第一回帝國藝術院賞をもらった時の詩。母は大正十四年父は昭和九年妻は同十三年に死んだ。裸にして獨。晝日彫刻燈下作詩。門弟婢僕皆無。仕事場一居室三。身體頑健。

ほめられるやうなことはまだ爲ない。

そんなおぼえは毛頭ない。

父なく母なく妻なく子なく、

木端と粘土と紙屑とほこりとがある。

草の葉をむしつて鍋に入れ



配給の米を餘してくふ。

私の臺所で利久は火を焚き、

私の書齋で臨濟は打坐し、

私の仕事場で造化の營みは遅々漫々。

六十年は夢にあらざ事象にあらざ、

手に觸るるに随つて歲月は離れ、

あたりまへ過ぎる朝と晩とが来る。

一二三四五六と或る僧はいふ。

## 帝都初空襲

昭和十七年四月二十日作。此年四月十八日午後アメリカ爆撃機初めて帝都を空襲した。爆撃に耐れない市民はむしろ物珍しげに此を迎へた。空襲警報の發令も遅れた。焼夷弾による火災が數箇所から起つたが大事に至らず鎮火した。機銃掃射で國民學校生徒が一名射殺せられた事を後で知つて、市民の敵愾心は一時に爆發した。

春さきにつづく大風がばつたり止んで

麗かな晩春初夏の晴れ渡つた土曜日の午後、

開關以來初めての空襲といふものが

東京の空に實演された。

いきなり高射砲の音がぼんぼん聞えて

学校のサイレンが頭の上で大きく鳴った。  
用意の身支度をして部署につく。  
隣の人が井戸の水を四斗樽に張つてくれる。  
東北方の空に火事らしい煙があがる。  
うしろの方で又ぼんぼんと音がする。  
女性群のもんぺが揃つて  
いつでもいらつしやいと待つてゐる。  
日はうらうらと中天に高く、  
水を含んだ青い空にプロペラがこだまする。  
張りきつたやうな又のんきなやうな、

ほんとのやうな又うそのやうな  
そのくせ嚴たる眼前の事實。  
千駄木林町の高臺に時間は平らかに流れ、  
やがて解除のサイレンが膨ふくらがるやうに鳴る。  
畏きあたりの御安泰をラジオが告げ、  
御苦勞さまといつて  
夕餉の支度にみんなもかへる。

## 戦歿報道戦士にさよご

昭和十七年五月三十一日作。支那事變殊に大東亞戰爭以來、通信報道を任とする各新聞社其他から現地に派遣せられる記者の数は實に夥しい。民間の通信員として具さに不便と困苦と危険とを乗り越えての献身は全く眼に見えない無比の力である。その惜しむべき殉職者等の爲に此年新聞聯盟記念號が出た。此詩はその號に寄せられた。

かくの如きを何にたとへん。

胸の和毛にたまをうけた

あの傳書鳩のけなげさ以上だ。

獍猛、果敢、挺身、決行。

そんな漢字も役に立たない。

ほとんど不敵の魂が

身に寸鐵を帯びずして

最も語るに足る第一線を見て突込む。

君の持つはカメラ、無電、ペンと紙。

十行の報道は君の血によつて印刷され、

銃後の民悉く硝煙の現實を知る。

死してなほ放たぬ君の筆は

故國の津々浦々に皇軍の息吹を送り、

世界の電波縦横に輪をえがいて

君の通信の眞にをののく。

兵にあらざして兵火に斃る。  
そは鳩の如くいたいけにして  
又すさまじき護國の鬼。

## 民國の民と兵とに與ふ

昭和十七年六月十八日作。此年三月蘭印首都バタビヤ陥落。同蘭印聯合軍降伏。同ビルマ首都ラングーン占領。四月比島バタン半島攻略。同海軍部隊印度洋上に活躍。五月英軍主力をビルマ國境アラカン山脈外カレワに撃滅。同比島コレヒドール要塞占領。同珊瑚海大海戦。同ビスマルク群島截定。同支那方面浙東地區大殲滅戦開始。

盧溝橋事件は天意であつた。

今にしてその意味を世界は知つた。

歴史の歩みの嚴肅さに

日本自身さへ驚いてゐるのだ。

日本に神々の慮おもひばかりあつて

世界を一家の安きに導かうと

あの一發の機微をつかんで

まづアジア解放の端緒をひらいた。

中華民国土著の民よ、

ひろく眼を放つていま東亞を看よ。

そこに何が行はれてゐるかを正視せよ。

重慶の要人は私財を他國に抑へられて

やむなく賣國の苦戦にあへぐ。

強制せられた卿等土著の將兵よ、

今こそ戈を倒しまにして重慶に向へ。

遠交近攻の夢をすてよ。

盧溝橋に發した天意を卿等の手で完うせよ。

## 眞珠港特別攻撃隊

— 箏曲のため —

昭和十七年八月十日撰筆。五月一日箏曲家今井慶松氏と面會。九軍神讃仰の作詞を求められる。筆者もかねて九軍神の武勳を物語風に物せんとする心あり、爾來構想をととのへて、八月七日筆を執り十日成る。今井慶松氏一年餘に亙つて作曲。昭和十八年十二月十九日共立講堂に於て發表せらるる筈である。

「君のため何か惜しまん若櫻散つてかひある命なりせば」  
ちつてかひある命ぞとおもひさだめし丈夫の一途のここ  
ろぞたふとけれ。

ここに東亞の共榮をめざして支那のあやまてるかの抗日

の勢力をまづ懲らさんと皇軍はすでに四年の日をへたり。

抗日支那をあやつりて今なほ漁夫の利を得んと神ながら  
なる皇國の正義をしらぬ米英は爪と牙との恫喝を太平洋に  
めぐらしてつひに經濟斷交す。英は老獺無慙にて米は厚顔  
はてしなし。

ああ富と力の横車。かの黒船の昔よりわがはらからの血  
になきし悲憤の思いくばくぞ。太平洋に波たかし。彼うつ  
べしの一念は國の備のつはものの胸にもえぬぞなかりける。

時なるかなや畏くも大詔はくだされぬ。世界の歴史をあ  
らたむる此日ぞ昭和十六年凜烈師走の八日なる。間一髪を

いれずしてハワイ眞珠港内に米國太平洋艦隊主力はほろぶ。  
これをほろぼすもの吾が精銳。空に海軍飛行機隊。海に特  
別攻撃隊。

なかにも特別攻撃隊はわづか數隻の特殊潜航艇にして、  
岩佐直治大尉これをひきゐ、横山、古野兩中尉、廣尾少尉、  
横山、佐々木兩一等兵曹、上田、片山、稻垣三二等兵曹の  
勇士らこれにのりくめり。

ハワイ、オアフの眞珠港、港口せまく長くして機雷原いと  
嚴重に設けらる。折しも天祐神助なる四千海里の荒天つ  
づき。敵にしられず近づきし夜のひきあけの眞珠港。さら

ばとかるく母艦をはなれ、必勝決死の勇士はすすむ。あや  
ふき水路をしづしづとかねて定めぬ部署により、港内ふか  
く潜入し、敵艦隊の全貌を今こそその目にはたと見れ。

この時友軍飛行機隊、山すれすれに襲ひきて、すは敵艦  
を雷撃す。すは敵艦を爆撃す。たちまち空は火にはじけ、  
海はさかまきわきかへる。特別攻撃隊の勇士らは莞爾とゑ  
みて今こそとおのおのめざす敵艦に至近距離まで肉薄し必  
中必殺の魚雷を發す。戦艦巡艦首をつらね、或はかたむき  
或はしづみ、火薬爆發、重油流出、一朝にして殘骸とこそ  
なりにけれ。

なほも炎の海をぬひ、砲火をくぐり、殘敵をくまなく索めてしとめしが、勇なるかなや一艇は海底ふかくなほひそみ、組木などして日をくらし、頃しも二十日の月いでて二分といふにうかびいで、さすや月影波のうへ、こころしづかに敵艦の主力のいまだ沈まぬをそれとみとめて轟沈す。火焰天に沖し鐵片たかく飛散せりと港外よりも報ぜらる。アリゾナ型をはじめとし、ここになみある敵艦はこの日の夜襲にのこりなくうち碎かれてはてにけり。

さはさりながら勇士らもつひにかへらず、とこしへに眞珠港内底ふかく護國の神となりたまふ。午後七時十四分以

後無線放送杜絶ときかかれたるこそ是非なけれ。

ああ特別攻撃隊。もとより生死を超えたれば、ただ大君のおんためと、はやくもこの日の戦をかねてこころに定めたり。ハワイの主力撃滅の一の太刀こそ運命の決するところ、ちるべきは此所ぞと若きつはものが心をあはせ必勝の特殊潜航工作をひそかに案出實驗し、ひそかに準備訓練す。めざすこと果さんほかに何ありや。げにげに神の國にしてこのほがらなる覺悟あり。死は死にあらず千代かけて大君のへにこそい行くみちときけ。

もとより勇士も人の子なれば、そのふるさとに父もあり



わきて又なき母もあり。言にはいでね今生の最後とみ手は  
とりにけん。幼なじみの山川に何をひそかにかたりけん。

「身はたとへ異國の海に果つるともまもらでやまず大和  
皇國を」

ああ眞珠港特別攻撃隊の九軍神。武勳かしくくも 天聽  
に達し、特に二階級をすすめらる。きくに涙のせきあへず、  
老も若きも、あなたふと、これぞ皇國の臣にして底つ磐根  
のゆるぎなき命とこそは仰ぎけれ。

### 感激をかくさず

昭和十七年十月廿八日作。廿七日午後八時卅分、サンタクルーズ諸島北方洋上に於ける  
「南太平洋海戦」の戦果大本營より發表せらる。敵空母四隻戦艦一隻艦型未詳一隻撃沈其  
他五隻撃破、敵機二百機以上撃墜。國民の生活日に戰時的變貌の色を濃くする。此年六月  
十八日日本文學報國會發會。十一月三日より四日間第一回大東亞文學者大會開催。

幾許を以て幾許に對したかを知らない。  
ただその戦果の歴大に驚く。

敵は孤島の一端に上陸させた  
自國の兵の殲滅をおそれ、  
あとからあとから幾らでも



補給の艦艇を出さねばならない。

孤島の一端にとりついた

敵の部隊がふくれる爲には

厖大な敵艦艇が必ず来る。

必ず来るのを必ず邀へて叩きつぶす。

わが海軍の頭脳と力と

大膽無類のその戦法とに

國民泣いて感激をかくさず。

感激轉じていよいよ決意を新しくし、

悲愴の覺悟に身邊をかへりみる。

ああ南太平洋海戦の報

鐵槌の如くわれらの頭かぶをうつ。

## 神とともにあり

昭和十七年十一月十六日作。此年五月末特殊潜航艇濠洲シドニー港強襲。六月同マダガスカル島奇襲。同北洋ダツチハーバー猛襲。同キスカ、アッツ兩島占領。同潜艦米本土砲撃。此間歐洲にては獨軍進撃スターリンググラードに迫る。八月ソロモン海戦。九月第三回中央協力會議開催。十一月第三次ソロモン海戦。ガダルカナル島激戦。

「犬と某々國人入るを許さず」と

おのが生れた土地の公園に書き出されて

それでも黙つてゐたのはつい昨日の事だ。

日本一たび起つて米英蘭を撃つ。

大東亞圏内に今かかる横暴の文字無し。

天上天下、

ア ज्याの住民ア ज्याを護り、

ア ज्याの良民ア ज्याをたのしむ。

これを非とする神は此の世にいまさぬ。

これを非とする理不盡は唯彼等の我愆だ。

世界の選良と思ひ上つた彼等の夢が

逐はれた彼等を齒がみさせる。

昔日の非道に未練をすてない

米英蘭の妄執断じて絶つべし。

大東亞の同胞われら日本の義を知り、

われら神とともに彼等を撃つ。  
公明天日の如きわれらの理念と  
無比の武力と甚深の文化と  
今や世界の蒙昧をひらくのみだ。

## 新 天 地

昭和十七年十一月二十三日作。日本國民の自覺やうやく深まり、神國日本の信仰やうやく上下の各層に浸透して來た。もはや外來の思想文化を無批判に渴仰して自ら新しとする者もなく、外人まがひの生活や風俗に自ら高しとする紳士淑女も居なくなつた。國風の精神をうけつがんとする心に燃えて國學古學に志す者相繼ぐに至つた。

天地いよいよ古くしていよいよ新し。

われら根源の美によりて斬新にすすみ、

幾千年のわれらの天地、

いまたちまち世界の歴史をあらたむ。

われらつねに禊して汚染を祓ひ、

文化の過剰に倒るることなし。

尖鋭の末端を究むれども

必ず悠久の大本にもとづく。

これ底つ磐根に太しくなり。

炳として明かなるもの

われらの上にあり。

われら今これを仰ぎて

天地の新しきと古きとを知らず。

いよいよ古くしていよいよ新しき、

ただ斯の如きを知るなり。

われらの天地おのづからここに在り、  
新天地おのづから四方に向つて開くるのみ。

## 覆滅彼にあり

昭和十七年十二月十四日發表。緒戦の一撃に大打撃を蒙つた米國も漸く陣容を立直し、此年後半期頃から反攻の企圖を示す。物量の數を恃み、わが占領地の奪還に本腰を入れて來た。戦局將に決戦の相を呈せんとする時、十二月十二日、畏くも 天皇 伊勢皇大神宮に天祖を親拜、告文を親奏あらせらる。臣民感極まり、士氣大に昂る。

米英財をたのみ數をたのみ

必ずわれらを困憊消耗せしめんといふ。

刻薄無殘な彼等の獸性は

日本民族を鑿殺して假借せざらんといふ。

われらいま大東亞の廣袤に陣を張つて

斷じて彼等の脊骨をへし折らんのみ。

敵強き時われらの鬪志いよいよあがり

敵大なる時われらの膽斗たんの如しだ。

戦ひつつわれらは育つ。

大東亞の資源整備せられ

國を擧げてわれら財と數とをも亦生まん。

神明われらの上にある、

かしこくも 天皇親しく

天祖ましますおん宮に成らせたまふ。

神の裔なるわれら固く誓つて

ひとへに宸襟を安んじたてまつらん。  
これを思ふ時全身の能力悉く目ざめ  
われらの部署忽ち敵前必勝の氣に満ちる。  
覆滅もとより彼等のものだ。

## われらの道

昭和十七年十二月作。飽くまで東亞の自立を認めようとする英外相イーデンは、「米英  
聯合軍の東京入城はベルリン入城と共に重大であり、日本の軍事機構が撃碎されず大東亞  
共榮圈經營の野望がある限り米英は絶えざる脅威をうけねばならぬ。吾等がドイツを屈伏  
せしめた後には日本を撃滅し、東京入城を實現しなければならぬ」といふ。

ひたすら輪奐の美を誇る文化は低い。  
世界最大をよろこぶ文化は幼い。  
チューリップ、カンナの炎の前に  
一莖の白い茶の花が嚴として持つ  
この高さを人類は知るがい。

リグレイを嚙んで人を憚らぬ

あの無作法を人類は恥ぢるがいい。

富の獨占に一切をかける

無殘な俗情を人類はすてるがいい。

東洋は再びおこる。

再びおこる東洋は自らただ惑溺せず、

人類文化の總決算を整備して

精神と物質との比例を匡す。

一切を生かして根源をあやまらず、

まつたく新しい美の理念に

今や世界を導き入れようとする。

彼等に理解なくば彼等は遅れる。

むしろ毛もくぢやらな彼等を救ふのが

神々の示したまふわれらの道だ。



## 戦にきよめらる

昭和十八年正月發表。昨年十二月八日大本營から發表せられた大東亞戰爭開始以來に收めた帝國陸軍の綜合戰果は遺棄屍體俘虜七十五萬餘に及び、帝國海軍の艦艇船舶擊沈破砕八五三隻、飛行機擊墜破三七九八機以上に及ぶ。國內著々として戰時態勢に整備せられ、最早私利を追ふ浮動生活は容されず、隣組國民組織に世人はほほ習熟した。

神よさしたまふ戦は

われらの生活を一新する。

もう貧富の分ちもわれらに無い。

私慾のあがきは恥となつた。

この世の禍のいちばんの土臺石、

頑とした利己の影もうすくなつた。

一切の見えは愚かしく

かくれた企らみは唾棄せられ

ありのまんまの性根をささげて

ただ 大君のまけのまにまに

深く遠い一途の生活に向へる世が來た。

けちな俗念の何にもいらない

かういふ世界はせいせいする。

まことに神のよさしたまふ

この戦によつてわれら潔く清められ

再び年を新たに  
して  
胸爽かに元旦をことほぐのはいい。  
卑しいきのふの念慮を脱して  
心すがしく神のみ前に立てるのはいい。

### 決戦の年に志を述ぶ

昭和十八年正月發表。米國の西南太平洋方面に於ける反攻は愈々必死の力を傾け來り、消耗を意とせず、ソロモン群島ニューギニア島の密林中に寡兵よく之を邀撃する前線將兵の艱苦想像に餘あり、國民寸時の儉安は忽ち戦局に影響し、銃後生産陣の重要性あらためて強く世人の覺るところとなる。戦の真相峻嚴。敵の戦意悔り難し。

文字通り國民皆兵の日が來た。  
老若男女國を擧げて今前線に居る。  
九紫の火星楊柳木で  
今年六十一の老骨でも  
さつぱり還曆などといふ氣がしない。

むしろ數字をさかさにして

一十六から始めたい。

日本はけふ、人がいる、兵がいる。

頭腦がいる、腕がいる。

社會百般、決戦に向ふ。

決戦とは斷乎として敵に勝つことだ。

敵の骨を切ることだ。

そこまで事が迫つてゐる。

わたしくは美の世界を守りながら

この生活の一切をかけて彼等を撃たう。

この生活の一切をかけて彼等を撃ちながら

嚴として美の世界を守りぬかう。

老兵必ずしも老を語らない。

## 殲滅せんのみ

昭和十八年二月八日作。ガダルカナル島の米兵わが兵を猿とよび殘虐辱くべく、聞く者憤懣せざるはない。一月九日中華民國國民政府對米英宣戰布告、日華共同宣言發表。一月廿九日レンネル島沖海戰。二月上旬ガダルカナル島に作戦中の部隊他に轉進。ソロモン水域に於けるわが航空部隊の戰果益あがる。印緬支國境新作戦。

輕蔑するものは輕蔑せられる。

われらを猿と呼ぶ者、野獸のみ。

われら、けだものの族を内に有たず、

人ことごとく神の兵だ。

神の高さ限り知られず、

神のこころ清く、ふかく、

彼等の俗念をはるかに絶つ。

ひとたび起つてわれら

彼等の惡とけがれとを撃つ、

徹頭徹尾の道だ。

神の息吹われらに満ち、

百難のため文物興り

消耗のゆゑに民力ふるふ。

傲暴への憤り内にみなぎり

發して必殺の劍となる。

幾千年の歴史今日に集中し、  
神よびたまひ、われら答へ、  
猛然たる奮勃の氣  
今やただ彼等を壓倒せんのみ。

### 紀元節を迎ふ

昭和十八年二月十一日發表。此多は夜間は冷えて防空用水の凍結を防ぐため樽に氷をまく必要もあつたが、晝間はわりに温く、雪も降らず、いつのまにか春に移行した。雨も程よくあつたので水溜もなく、紀元節の頃は晴天つづきで、當日は稍温といふ日和であつた。鉢の梅かをり、小鳥來鳴く。此日イサベル島沖海戦の發表あり。

二月十一日、

この佳節を迎へんとして心肅然たり。  
眼を閉ぢて去年をおもふ。  
まさにブキテマに迫れる死闘の日なり。  
遠く銃後にありて一年の歳月を生く、

佳節再び來りて大東亞すでに建つ。

皇祖國を肇めたまひてより二千六百三年、

大みことのりの御稜威

今に至りていよいよあまねし。

大東亞の四邊

われに逆ふものまた力をつくし、

戦はやうやく深まり

戦はまさに殘虐の域に入る。

一切の缺乏は日常のことにして

今や銃後決戦の意に滿つ。

この時この佳節を迎へんとして獨り坐せば

庭前の梅花しきりに香る。

われら幸に美し國に生れて

かくの如き美をかくの如き時に感じ、

祖先とその思を同じくするなり。

われら戦のただ中にありて

こころ必ず清からんと願ひ、

たとへば靈峰朝の日をうくるが如く、

汚穢の念影をとどめず、

百難を超えて大ならしめたまへといのる。

この佳節を迎へんとして心肅然たり。  
皇祖の大みことのり尙ほ耳にあるを覺ゆるなり。

「撃ちてし止まむ」

昭和十八年三月四日作。二月十日に發表せられたガダルカナル島の軍轉進の報は國民に強い衝激を興へた。敵撃滅の誓は新にせられた。神武大帝の御製が國民の胸にひとしく蘇つた。街上の到る所に此の御言葉が展示せられた。戦力増強、軍需輸送の急務が叫ばれた。木造船多量建造の必要から供木運動が全國に強行せられた。

いま正に生存と野望と相搏つ。  
彼等野獸の齒を鳴らしてわれらに挑む。  
われらが同胞遠く瘴癘の地に死闘す。  
彼等大を恃みてわれらを屈服せしめんとし、  
執念き反攻をしばしば企つ。

皇軍戦へば必ず勝てども

卑しきやつこの手を負ひて

報いずして仆るるつはもの亦多し。

それをききてわれらの憤すでに極まる。

今や彼等を撃つの一事に

一切の生活と時とは凝集せられ、

國土の一木一草、路傍の石くれ、

ことごとく叫んでわれらに答ふ。

「撃ちてし止まむ」と御謠みうたしたまひし

かの上つ代は古しへならず、

われら一億ころに雄誥をたけびをあげて

今にして此の時、

ただ彼等を撃ち盡さんのみ。

われらの生活彼等を撃つ事によりて匡され、

われらの思想彼等を撃つ事によりて深まる。

われら積極の道に立つ、

力無限にして澎湃たり。



## あそこで斃れた友に

昭和十八年四月卅日作。三月四月太平洋の南と北とに海戦航空戦數ふるに邊なし。三月十八日ビルマ行政長官パーモ氏等入京、廿三日 天皇陛下に謁見仰付けらる。昨年六月東太平洋に於て艦と運命を共にした山口司令官、加來艦長の勳が四月廿四日發表せられる。かかる重大な戦のさ中に職責を守る美術家の苦衷を筆者は書いた。

痩せ細つて草の根を噛み、  
水びたりの壕の横穴にねて、  
つるべうちの砲彈をあびながら、  
なほ一步も攻撃をやめぬといふ。  
君もその中に曾つてゐた。

陛下の御軫念を思つて哭き

或夜糧食を運びながら君は斃れた。

君は征く時いつた。

「自分は敵を撃ちます、歸りません。

先生は必ずお仕事を爲遂げてください。

それを思ふと愉快です。」

君は私を信じてゐた。

その信は古代の信だ。

私は一切の生活を戦力に捧げる。

私は十分の一で生きる。

私は防空の戦士となる。

けれども自分の仕事の美をすてない。

私の目標は遠い。

私の技術は目前の役に立たず、

私の血の中にある秘義は徐ろに育つ。

或日君は私の耳もとでいふかしら、

「先生、出来ましたなあ、

奥さんも来てごらんなさい」といふかしら。

## 海軍魂を詠ず

昭和十八年五月五日作。海軍記念日に捧ぐる爲に此詩を書く。此月海軍航空部隊ニューギニヤ方面濠洲方面に出動多く、訪米中の濠洲外相エバットは米國よりの遠征派遣軍を要請してゐる。紐育タイムズ従軍記者ウオルファートは「日本海軍の砲撃は機械以上の正確さである」といひ、又「その技術と闘志とは正に世界第一級である」と述べてゐる。

日本本土がすでに巨大な軍艦だ。

日本海軍無敵の由來は

劫初このかた神の大御心にある。

をこがましい曾ての五五三が

忽ち無意味に歸したのを知るがいい。

日本海軍の計算には  
數字の上に魂の冪がつく。  
無敵の實力はいま  
太平洋印度洋に展開せられて  
まさに世界の奇蹟を生んでゐる。  
近代科學と古代精神との合一。  
科學は前進し、精神は遡り、  
日本海軍の大、古今を貫く。  
見敵必殺の傳統、  
擊滅の闘志、

海軍魂、  
悉くその源を至誠の念に發する。  
人は仰ぎ見る、  
波を切る艦首に光りかがやくもの、  
切を超えて高きもの、  
切を超えて聖なるもの、  
金色の菊花御紋章。

## 軍人精神

昭和十八年五月九日作。日本文學報國會詩部會は戰時報國の念に燃え、國家の要望に應じて、詩を通じての國民士氣昂揚のため、或は健民運動に、或は獻艦運動に、或は供木運動に會員學つて熱心に協力して來たが、此月又、軍人援護運動のため軍事保護院に會員の詩を献上した。此の詩はその一つである。便乗といふ世上の非難は當らない。

今にしておもふ、

われらが軍人精神の美は

古今東西にその比なし。

美ならざるはわれらが武人にあらず、

その精神人倫の極致にいたる。

歐米の史籍武を語るもの多く、

しかもひとしくこれ傭兵の義と勇となり。

彼等の武はかならず兇。

彼等の軍は利にあらざれば進まず、

最善にして殺戮、

最悪にして蠻行に及ぶ。

われらが軍人とは神の兵に外ならず、

一に仰いで大御心にしたがひ、

私なく、成敗なく、

一兵なほ生死の彼岸にあり、

みな神意のあるところを體得す。  
何が故の戦なるかを知り、  
天地に俯仰して毫末の恥なし。  
われらが戦陣訓は即ちわれらが生活訓。  
われらが軍人精神の美や  
まさに人類に覺醒を與へんとする  
われらが民族精神の光芒たり。

### 突端に立つ

昭和十八年五月十一日作。海洋への關心を高めるため、讀賣新聞社は「海十題」と題して十名の詩人から詩を徴し、或は放送し、或は海洋寫眞の大額と共に百貨店に展示した。此詩はその一つ。海戦の烈しさは即ち海兵力増強の急務を物語る。世人ガダルカナル島戦線の一端を傳へ聞くに従つて海上戦力の重大さを身にひしと感じた。

東經若干、

北緯若干、

波、岩をかみ、

碎けて爆雷の飛沫をあげる。

十四日の月、三〇度にのぼり、

層積雲の集積たちまち破れ、  
パプアの島に似るもの擾々とさわぐ。  
風は鹽白く私の耳にはためき、  
太平洋の巨體まろみを帯びて  
重く、厚く、黒く、  
眼下一面に沈澱してゐる。  
國土の突端らんらんと目をみはり、  
この大空間のあらゆる方位に  
見えざる電波の如きものを發する。  
よしや磁針の伏角に異變はありとも

斷じて卑しきやつこの翼はゆるさじ。  
破廉恥罪にひとしき機銃を  
漁船めがけて放つやからに  
神明かならず報いたまふ。  
太平洋、前にあり、  
本土の東極ひんがしまる所に立ち盡して  
ほとほと立ち去りがたきを覺える。  
同胞遠く水漬く屍となり、  
喜んで神意にしたがふ。  
月更にのぼりて海更にひろく、

天末の一線ただ茫々たるところ、  
わが心を惹きてわりなし。  
俄に四邊森嚴の氣に満ち、  
風ばたりとやむ。

### 嚴然たる海軍記念日

昭和十八年五月廿七日期作。數日前の聯合艦隊司令長官山本五十六大將戰死の報は國民を驚愕の底に陥れ、世人は一瞬耳を疑つた。此月廿一日夜詩部會は獻艦の爲の「艦たてまつる詩の夕」といふ朗讀會を催した。午後三時のラジオが此大本營發表を報じたので、此會は圖らず長官を悼む夕となり、涙を以て詩の朗讀を聴く人々もあつた。

米英今はわれを侮らず、  
死力をつくし、萬策をめぐらし、  
鐵床雲かなとくぐもの如く逆上して  
寸を刻んでわれにせまる。  
戦は前線銃後を貫いて太く脈うち、

その極盡の實相を現前せんとす。

戦の突端は空と海とにあり。

すでに海の長官空に戦死したまひ、

われら國を擧げて奮然たり

恰もめぐり來れる海軍記念日を迎へ、

この日朝野の心嚴として神明に向ふ。

海相 すのらおほみかみ 皇大神に幣をささげ

全海軍時を同じくして神域を遙拜し奉る。

銃後は一大軍需兵站部隊にして

いちにんと雖も生産に與らざるなし。

決然としてわれらは誓ふ。

われら天祖の末裔に神明の加護あり、

われら成し遂げ能はざる事なく、

われら萬敵に勝たざる事なく、

われら御稜威のゆゑに光あり、

われら必ず人類我利の闇を照らさん。

われらは能く一を十にし、十を千にし、

かの逆上せる鐵床雲の妄想を

斷じて天涯に雲散霧消せしめん。



## 五月二十九日の事

昭和十八年六月一日作。五月卅日十七時の大本營發表により、アッツ島守備部隊の全員玉碎を知る。「……五月廿九日夜敵主力部隊に對し最後の鐵槌を下し皇軍の神髓を發揮せんと決意し全力を擧げて壯烈なる攻撃を敢行せり。爾後通信全く杜絶全員玉碎せるものと認む。傷病者にして攻撃に参加せざる者は之に先だち悉く自決せり。……」

もとより武士のあはれを知らぬ彼等の眼には

ただ日本軍全滅すとのみ映じたのだ。

皇軍二千餘人悉く北洋の孤島に戦死す。

この悲愴の事實に直面して

その神の如き武人の心にわれらは哭く。

われらは哭く、われらは哭く。

日本全國民、眼を閉ぢて哭く。

その死の事實の故のみならず、

その死を潔しとした二千餘人の心に哭く。

清さ、高さ、ありがたさに胸が裂けるのだ。

味方に遠い敵中の離島、アッツ島、

糧食彈丸限りあり、

十倍の敵殺到して

空海陸の猛撃夜を日につぐ。

世界の通念、合理の常道を抹殺して

山崎部隊長は頑として反撃する。  
二千餘人のつはもの、心は心に傳へて  
既に最も清らかな覺悟を定めた。  
微塵の躊躇なく、毫末の逡巡もない。  
つひに五月二十九日の夜半、  
隊長靜かに處理すべきを處理し、  
全軍 聖壽の萬歳をとなへ奉りをはつて  
重く傷ける者病める者は悉く自決、  
つづき得るもの百數十、  
敵の主力に突入して奮戦激闘……

われら同胞ここに至つて口、語るに堪へない。  
ただ首をたれて黙するばかりだ。  
われら黙する者の胸中より迸るは何ぞ。  
愕然として目ざめるものは何ぞ。  
捨身邁往の勇猛心、  
神明に通ずる貫徹の誓だ。  
戦の一事は皇國の陸海軍磐石の如く、  
一切の起伏は偏に神の御心にあり、  
人意のはからひを絶つ。  
百難われらに幸し、

萬苦われらを鍛錬する。  
銃後期せずして心たかまり、  
生活、生産、戦陣を凌ぐ。  
北方敵中皇軍の義烈、  
美、きはまりなく、  
われら哭いて心を洗ひ、  
敢然としていま立ち、行ふ。

### 山本元帥國葬

昭和十八年六月五日發表。天皇陛下に於かせられては山本海軍大將に特に元帥の稱號を賜ひ、薨去に付特に國葬を賜ふ旨仰出された。五日は國葬當日。齋場日比谷公園内、墓所多磨墓地。大本營發表によれば、元帥は本年四月前線に於て全般作戦指導中敵と交戦飛行機上にて壯烈なる戦死を遂げられたのである。長岡産明治十七年生。

元帥山本五十六提督の遺骨  
いま國葬の儀によつて葬らる。  
元帥の勳功めもあやに、  
同胞もより之を熟知す。  
われら心を傾けて元帥を送り奉り、

あらためて元帥のおん面影をしのぶ。

元帥幼にして長岡のきかんぼ、

志を立てて不屈不撓、

外に使して君命を辱めず、

卻つて缺舌の老雄をも脅かす。

元帥身を以て東郷精神の根幹に生き、

更に近代戦術の機秘を握り、

機略に富み、機先を制し、

時に豪放、時に精緻。

若き世代の眞面目を限りなく愛惜し、

長官の身をほとほと忘れて

一兵の身を忘れず、

丹心を乗つて師友に降る。

干戈の間文をすてず、

國風時として絶唱。

眼笑ひ、口怒り、

むしろ學童腕白の趣あり。

かくの如き提督の力、敵を撃ち、

忽ち太平洋に不敗の堅陣を布き、

更に猛進つひに陣頭の空に隠れたまふ。

國民喪に服していま元帥を送り奉り、  
心武者ぶるひして元帥に祈る。  
元帥の成したまはんとせしところ、  
われら必ずこれを遂げん。  
元帥叱咤して遠くわれらを導きたまへ。

### 報道の戦士をたたふ

昭和十八年六月十四日作。日本新聞會發行「新聞報國」創刊號に寄せた詩である。新聞界にも統合が行はれ、紙面も四頁または二頁となつたが、文化學藝欄を全廢した新聞はまだ無い。此欄はむしろ世人の求めて呼吸せんとする綠地帯の觀がある。日本讀書新聞の異常の賣行と共に如何に世人が内面の營養に欣を得んとしてゐるかを示してゐる。

「記者殿」と兵はいふ。

親愛と尊敬と、もう一つ、

聞きたい事を山ほど持つ

この最新知識へのあこがれとが

たつた一言の中にある。

前線銃後のいづくを問はず、  
まことに記者殿はわれらの耳目だ。  
耳目以上のむしろ叡智だ。  
飛びぬけた勘のするどさ、  
一種獨特の傳統に鍛へられて  
どんな紛糾の中からでも  
一本の眞理を引出し、  
どんな際どい危険の中へも  
その身を挺して現實を見きはめる。  
護るべきは護り、

報道すべきは分秒をも争ふ。  
衆庶の歸趨を筆端に指示するもの、  
報道の士は大いなるかな。  
一日を四十八時間に叩きのばし、  
疲労その極に至つて尙ほ已まぬ  
この不屈の魂にかがやきあれ。  
日日決戦の時にあつて  
われら朝夕ただ君の信號を待つ。  
百を含むその簡潔な信號を待つ。

## われらの死生

昭和十八年六月十六日作。山本元帥の戦死、ガダルカナル島將兵の挺身、アッツ島勇士の玉碎といふ事實の報道は此戦争の峻烈な真相を世人の身近に感ぜしめ、物的戦力の飛躍的増強が焦眉の急なる事を痛感せしめた。臨時議會に於て企業整備の具體策闡明せられ、學國一大軍需工廠の意味が強調せられた。チャンドラ・ボルス氏來朝。

死が生よりも生きるとは

生が死を壓倒するのだ。

充ちあふれた生の力が

死を超えて死を死なしめない。

わが事終れるにあらず、

わが事無限大に入るのである。

かくの如き生なくして

かくの如き死も亦ない。

自己の力自己の極限を破り、

迸つて精神の微粒界に突入する。

かくの如く人を死なしむるは

天寵人にあつきなるかな。

「わが責果されたり」と

彼國のネルソンはいふ。

わが責果されたりとは神かけて

われらの誰がおもはう。

七生報國の念々つもつて

われらは無窮の天壤をゆく。

責を果して手をあげるのは

彼等、ネルソンに倣ふが故だ。

われらが山本元帥その死によつて

まことに生を現成した。

生ならず、死ならず、

無始より無終にいたる

われら民族精神の奔流

ひとへに滔々たるを見るのみだ。

元帥一波をあげて

萬波たちどころに起る。

われらの死生とはただこれだ。



## ビルマ獨立

昭和十八年七月三十日作。さきの議會で首相の言及したビルマ國獨立は此年八月一日實現した。パー・モウ氏を國家代表に推戴、内閣組織、對米英宣戰布告、我國との同盟條約締結を完了した。此詩はその慶祝放送の爲に書かれた。七月一日東京都制實施。ムンダ方面に上陸の敵と激戰。伊太利シチリヤ島に米英軍上陸。ムッソリーニ辭職。

印度と支那と佛印と泰との山嶽を押しわけ、  
サルウイン、イラワヂ、シツタンの大河を縦に並べ、  
東南アジアの大陸に巨大な楔をうちこむもの、  
西藏、雲南の高みからベンガル灣の波打際まで  
チークと稻と木棉とに地表を被はれ、

天のきさはしの如く壯大に位置するもの、  
北回歸線を頭上にいただき、  
雨季と乾燥季とに一年を恵まれ、  
黄金のバゴダに國をあげて信篤きもの  
ビルマはいま獨立を宣する。  
百餘年前の英軍侵入このかた、  
數知れぬ憂國の志士の空しく望んだ  
ビルマ獨立の悲願はつひに成つた。  
國土おのおのその處を得て  
その民これによつて共に榮ゆべしとは

畏くもわが皇謨くわうぼの夙すくに示し給ふところ。

傑僧オッタマかつて心魂をつくし

われらによらんとして時到らず、

いま明敏パー・モウ氏身を挺して起ち、

つひにこれを実現した。

ビルマの獨立はアジャ十億の民の光なるかな。

他を侵略して利を貪らんとする者敗れ、

義は必ず力を得て正しきにかへる。

アングロ・サクソンの族やからみづから驕り、

人類はただ己が指導の下もとにありとなす。

東亞の民の如き殆と眼中になく、

われらが深き精神の質を願ずして

ただ喧々けんけんたる實利の理念を追ふ。

かくの如き卑俗の文明をわれらは否定す。

彼等は彼等の圈内にあつてその波をあげよ。

斷じてわれらの文化を犯すをゆるさず、

斷じてわれら十億の民を瞞着するをゆるさず、

日本、かくて國運をかけて戦ふ。

ビルマ今獨立して明かに亦彼等を否定す。

彼等の好言に欺かれざるもの、

彼等の恫喝に恐れざるもの、  
まづビルマにその國旗をひるがへした。  
明敏バー・モウ氏の双肩は愈々重いが、  
アラカンヨーマの山嶮、  
マユ溪流の水域西方に嚴たり。  
決然たる新生活は潑刺として興り、  
黄金のパゴダ悠久の天を指さす。  
光あるかな、ビルマの獨立。  
東南アジア大陸の巨大な楔、  
天のきざはしビルマに永遠の正しきと美とあれ。

## 友 來 る

昭和十八年八月十七日作。悽愴な決戦が四方に酣なる時、むしろその故にこそ文化面の動きが顯著であつた。此年五月には日本美術報國會が結束せられたし、此月廿五日から三日間に亘つて第二回大東亞文學者大會が開かれた。廿二日大本營からキスカ島守備隊撤收完了が發表せられて世人は感動した。同日午前零時過島崎藤村急逝。

大平洋の南と北とに  
血戦死闘日夜を分たず、  
補給増産の急  
眞に寸刻を争ふ時、  
大東亞の文人墨客卓をかこんで

大東亞文化の建設を議せんとする。

高くしてその任重いかな、

大東亞精神圏の意義。

今やわれらが文人墨客

また疇昔の風狂獨尊に走らず、

ひとへに大東亞十億の民の歸趨と

われらが幾千年の文化の尊嚴とを懷ふ。

再びかのがりがりの過剰文明に

繚雲覆雨の繰返しを許さしめるな。

道ここにあり、

美ふかく潜む。

放漫自負の覇者の撃滅、

謙讓自肅の世界の建設、

大東亞の文人墨客凜として

一堂に會して各その志を述べる。

高くしてその任重いかな、

大東亞精神圏の意義。

海空陸決戦のさなかに遠く來つて

まさにその經綸を語らんとする友よ。

友に待つこと多く、

友に聽かんとすること亦架に満ちる。  
炎暑さかんなる時、  
皇都朝夕の涼風幸に友をねぎらへ。

### おん魂來りうけよ

昭和十八年八月二十七日作。職局ムンダ、イサベル島、コロンボンガラ島に及ぶ。ソロモン海戦一周年。此月十二日米軍飛行機北千島に來襲、直に逸撃これを擊退。敵ペララベラ島に上陸企圖。廿八日陸軍省發表によればアツツ島にて玉碎せる山崎陸軍大佐等戰死將校九十四名に對し二階級進級の恩命を拜す。

おん魂<sup>たま</sup>今もなほ孤島にあつて  
敵をなやまし  
友軍を導きたまふといふ。  
二千數百の將兵軍屬  
ただ一つの道をゆきて又かへりみず、

一朝にして悉く神となりたまひ  
身は幽<sup>かく</sup>り世<sup>よ</sup>にかくれいまして  
おん力、みいくさの千萬の楯となる。  
かの日よりわれらの心さらにめざめ、  
かの日よりわれらの誓さらに固く、  
愕然として舊套をすてて起ち、  
内に無盡の精根を得たるもの  
外に生産を倍加せしもの數知れず、  
國をあげていま眞の戦を戦ふ。  
この時、君恩重く下りて

山崎部隊長等をふかく嘉させたまふ。  
おん魂來りてわれらが感激をうけよ。

## 勤 勞 報 國

昭和十八年九月三十日作。戦力増強の急に應じ各種學校の間に勤勞報國隊結成せられ、各種職域間にもその組織成り、農事に軍需工業に國民勤勞を致す。此月圓期的な國內態勢強化方策發表せらる。航空戦力大擴充計劃。伊大利パドリオ政府無條件降伏。齒閉のムソリーニ救出せられて共和ファシスト黨再興を宣する。

よろこび限りなし。

生きてかひある世にいしくも生れ、

まさに千載一遇の天地に立つ。

今われら微小の身をもつて

大君のおんため、國土のため、

直接、われらが力を盡し得るなり。

かかる純一の世はかがやかしいかな。

われら身體髮膚ことごとく

公けの道につながら、

直ちに又同胞の身體髮膚となる。

われら内に學ぶと共に

外に出でて勤勞の實踐に學ぶ。

われら出でて學ぶは處世の術にあらず、

生きて潑刺たる民たるの道なり。

秩序と禮節とはわれら青年の掟。

隊伍を整へて勤勞に赴かんとすれば、  
見よ、大和島根の天と地と  
洋々としてわれらが前に展開せり。

### 肅然たる天兵

昭和十八年十月七日作。露滿國境方面に黙々として任務につく將兵の勞苦は想像に餘ある。南方の戦線と相違して靜かなること林の如く、ともすれば世の耳目に遠ざかり、しかも責任の大は寸時の儉安をもゆるさない。筆者の友も亦一將校として數年に亘つてその邊戍にあり。此の詩は其地の雜誌「滿洲良男」に寄稿。

「國境は大丈夫です」と、  
將士期するところあり、  
ただかくの如くいふ。  
言葉短けれども一切を盡す。  
日日夜々の訓練は猛く、



夏は火の如く、冬は五尺の堅氷に伏し、  
整備と用意と偵察と應變と、

満を持して見えざる力と絶えず闘ふ。

偉なるかな、關東軍。

萬丈の堤の如く國境に聳え立ち、

無言の威壓を遠くウラルの彼方に加ふ。

世界戦局の進退を一角に抑へ、

内えんえんとして

外しんかんたり。

戦はざる戦の辛勞に打ち勝つもの、

ただ精神の純潔にあり。

全軍、畏きあたりの空を仰いで

美しいかな、肅然たる天兵の列。

## 救世観音を刻む人

昭和十八年十月十日作。法隆寺夢殿に上宮太子等身の観世音と傳へられる塑像があり、まことに世界に比類なき至高至聖の美におはす。藝術にいそしむ者このみすがたを拜して、美の由て来る所の深く厳しきに懼れねばならぬ。近時社寺巡覽の學人多く、しかもその美を見るや様式と形態との間に思辨を勞する。感なきを得ずして此詩を作る。

刻み奉りし日と夜とをおのれ覺えず、

おん菩薩おのづから成りまして

まなこ開きて立ちたまふ。

まことにおはしまししに似て

おん丈すぐれ金色の光を放つ。

おのれ刻めるみすがた整はず、

形容ただ父祖傳來の定めを守れど

御首みびしこ異さまになり成りて

おのれが心のほかに出でたり。

おんもろ手またもつれて

あやふくおん珠を支へたまふ。

いかにして斯かるかをおのれ知らず、

ただ太子の今もなほいまして

ここに救世ぐせ観音の本體を示顯し、

おんみかど統べたまふ世のなほかれと、

火焰にまさる悲願のほのほ

ほとほとすさまじきを覺ゆるのみ。

おのれが手おん菩薩を刻みまつれど

正眼まぎやくにそを仰ぎ奉ること難し。

おん唇の色おのれが眼をいり

白毫おん眉にせまりて

おのれが胸をいたましむ。

おのれ刻めるみすがた整はぬを知れど

おのれが思きはまりて

ひとへに生御魂いけみたまに順ひまつる。

鞍作くらつくよと顧みさせたまふおん聲音こゝろか

雷霆はたがらの如く耳にとどろく。

いかでか再び手を觸れん。

## フィリッピン共和國獨立

昭和十八年十月十一日作。十五日放送せらる。フィリッピン共和國は此月十四日獨立した。是又日本の公約履行である。初代大統領ラウレル氏。これより先氏等は九月卅日來朝、此月二日 天皇陛下に謁見仰付けられた。フィリッピンでは直ちに國會召集、日比同盟條約成立。昭南ではチャンドラ・ボース氏を主席とする印度假政府獨立。

堂々たり、新生フィリッピン共和國の獨立。

まづ新憲法成りて公にせられ、

一切の準備整ひて漏るるなく、

日を定めてその獨立は世界に宣せらる。

昭和十八年十月十四日、

われらこの慶よろこびを同じくし、

はるかに東京都にありてその感激を分ち、

遠くわれらが祝福の熱意を致す。

呂宋のむかしわれら相互の交深く

今ふたたび東亞共榮の同志たり。

日本臺灣島の南端に立ちて望めば

その國水天の際にあり。

常夏の地にして天與の糧食饒かに

人おのづから暢達。

この物取つて食くらふべしとなす者相つぎ、

世界勢力の爪と牙と、

西より來り、東よりのび、

久しいかな、隸屬屈從の年月。

つひに巧に詐り奪ひしアメリカ之を武装して

その東洋制覇の基地たらしめんとせり。

あらゆる逸樂の珍羞をすすめて

虚構文明の毒に骨を抜かんと謀る。

東洋の士魂亡びず、

昔日のリサアル博士蹶起このかた、

志士アギナルド、リカルテ等多くの硬骨、

かつてはその運命を故國に捧げ、

近くはバルガス長官又折衝の間に

よくその機略を縦横にせり。

痛ましいかな、アメリカの貪慾大にして

一切のこと徒に空約束となりをはる。

アメリカの非道極まりなく、

野望つひに日本に及ばんとするに至り、

日本敢然起つて干戈をとる。

東方に道あり、

道おのづから東亞の解放を指さす。

忽ち米英蘭の輩を東亞の地より驅逐し、

東亞共榮世界新秩序の端緒

いま將に成らんとす。

龐大の敵必死の反撃に狂奔し、

東亞の天地ために硝煙あまねく、

決戦日夜を分たず。

この時、隣接の友、

つひに東洋に一邦國を建つ。

よくわが心を心とし、

力あるかな、舊フィリッピン、獨立の機を得て、

昭和十八年十月十四日の此日、

ラウレル氏高らかに新生共和國の名を宣す。

彼また推されて大統領たり。

堂々たり、新生フィリッピン共和國の獨立。

不幸中道にして破れたる昔日の志士、

志士と共に倒れて悔いざりし

幾多隠れたる義勇の邦人

いまわれらと聲を合せて

幽冥の境に言壽ことほすをあげん。

この共和國必ず新しきわれらの道義に立ち、

舊弊アメリカ主義の餘習を一掃して  
世界にその明朗の本質を示さん。  
天下ただ刮目してこれを待つ。

## 四人の學生

昭和十八年十月十八日作。此月一般學生徵兵猶豫の停止及び理工科系統學生の入營延期、理工科系統學校の整備擴充、法文科系統大學専門學校の統合整理等の「教育に關する戰時非常措置方策」が決定せられ、情報局から發表せられた。此發表は一時全國の學徒に異常な衝激を興へたが、忽ち青年は一切の宿心を超えて凜然たる決意を示した。

けふ訪ねてきたのは四人の學生。

見しらぬ彫刻科の若い生徒。

非常措置の實施によつて學窓から

いち早く入營するといふ美の雛鳥。

彼等はいふ、

「さとりがひらけたやうに

はつきり心がきまりました。」

私はいふ、

「どんな時にも精神の均衡を失はず、

打てば響いて

當面する二つなき道に身を挺するこそ

美を創る者の本領、

美と義とを心に鍛へる者の姿だ。」

四人の學生のうしろに

いま劔をとつて起つ無数の學徒がある。

君、召させたまふ時、

顧みなくて赴くは臣かみの誇である。

まことに千載にして一遇の世に生き

若き力として名乗り得る者は幸である。

四人の學生は多くを語らないが

眉宇すでに美しい。

「先生もどうかお元氣で、」と

この見しらぬ美の雛鳥らは歸つていつた。

學徒出陣は日本深奥の決意を示す。

聖業成りたまふの氣





彼等戦にむかつて起つ。

時急にして

若き俊穎の力あげて今日こんにちの力となる。

かがやかしいかな、

全學徒決然として隊伍をととのへ

一は銃をとつて直ちに空と海と壕とに赴き、

一は兵器と戦陣との間に研鑽を劇しくする。

今代こんだいと次代とは糾合せられ

沛然たるその威力、敵を撃つ。

大御稜威およぶところ、

必勝ただ時と日とにかかる。

米英しぶとけれども

神、米英に世界を與へたまはず、

世界の健康を新しくするもの

われらの勇と仁と智とにあり。

雲霞の如きわれらの全學徒

いま軍に従つて鍛錬せられ

敗るるなき皇軍に潑刺の一要素を加ふ。

國民目をあげてこれを見

心を傾けてこれをねぎらふ。

頼むべきかな、  
學帽を鋼鐵にするものの力。

## 戦に徹す

昭和十八年十月二十六日作。廿八日放送せらる。歐洲東部戦線に於ける獨軍の徹收はキエフ西方に及ぶ。イタリヤの軍艦は悉く米英側に屬し、地中海の敵の餘力太平洋印度洋に用ゐらる。戦局重大。國民今は既に昔日の念慮を更めた。國民服巻脚絆、もんぺ着用は日常事となる。ガス電気木炭節約、貯蓄強調。此月卅日日華同盟條約締結。

いざといふ時氣のそろふのは  
日のみ子を上にいただくわれらがとももの  
幾千年來かはる事なき血のしるしだ。  
いま米英の大軍を敵として東亞に戦ふ。  
かの元寇の國難は物の數ならず、

まさに國つ初めの戦このかた

再び來りて三たびは敢て來らざらん

八紘あめのしたを清め祓ふの戦だ。

この戦を戦ふ時、

われらがとも一人と雖も悉く戦ひ、

悉く戦の場に立ち、

悉く戦の心にきはまり、

悉く日常坐臥の生活を戦に捧げざるはない。

國民の眼戦の一點に集まり、

國民の思ひ戦を焦點としてめぐる。

戦は外そとをきよめ、内うちをきよめる。

一定いっぺん、私わたしをすてて一切を洗ひ去る時、

われらがとも純眞無雜のすがすがしさに勇む。

かくの如くならざるは神に恥ぢよ。

未だかくの如くならざるは

今日こんにちかくの如くあれ。

かくの如きは天空海嶽、

まことに浩然たるわれらがともだ。

秋いよいよ深まらんとして

日本全土の大氣かをりを放ち、

清淨の水、人の心に流れる。  
われらがとも高が醜い利潤を思はず、  
些細の面目を争はず、  
些細の行違に目に角を立てず、  
大いに不自由を身につけ、  
大いに源始初發の氣概を高め、  
大いに笑つて戦ふ時だ。  
すでに全學徒は隊伍をととのへ、  
青年の明るい逞しさもて  
自己の夢をすてて國の現實に赴き、

或は銃をとり  
或は兵器廠の一頭腦となる。  
子弟の決意をみて  
誰か一旦の安きを偷んでゐよう。  
高位高官みづから道路に立ち、  
庶民欣然として軍需の爲に力を盡す。  
ここに全く新しき美は生れ、  
透徹せる人生深奥の意義はめざめ、  
人戦つてしかも心安らかに  
困苦むしろいさぎよきを知る。

世界を奪はんとしてのぼせ上るは米英にして、  
世界を清めんとするはわれらである。  
この戦のいづれに神のみこころありや。  
明々白々、われら断じて信ずる。  
米英破る。  
世界健康の美かならず成る。  
われらの手によつてかならず成る。

### 断じてかへさず

(ブーゲンビル島沖海戦及航空戦)

昭和十八年十一月六日作。時恰も記念すべき大東亞會議開催、帝國、中華民國、タイ國、  
滿洲國、フィリッピン國、ビルマ國の元首級代表者五日東京都帝國議事堂に相會して意見  
開陳。其日十五時大本營發表はブーゲンビル島沖海戦の大戦果を告げた。艦船の撃沈破五  
九、敵機撃墜二五〇以上。

來たるものは断じてかへさず。  
元寇のむかし然り。  
今また然り。  
滄茫たる南海の大禍時、  
敵大艦艇舳艫相ふくんで

ブーゲンビル島の奪取を計る。  
東經一五五度南緯八度のあたり、  
索敵機まづ打電。

忽ちわが無敵海軍海空の精銳  
海をつんざいて雷撃また雷撃。

已にして歴大の敵艦艇亡し。

きのふ南鳥島大鳥島を襲ひ來し空母、

新銳の二隻亦神罰の如くここに屠らる。

來たるものは斷じてかへさず。

神州不文の律嚴として今日に生く。

詩人ただ涙して愚人の如く  
街上の同胞と共にその戦果を読む。

## 激戦未だ終らず

(第二次ブーゲンビル島沖航空戦)

昭和十八年十一月九日作。是が非でもブーゲンビル島トロキナ岬の上陸地帯を確保しようとする敵は、まるで札びらでもまくやうに後から續々と大艦艇と輸送船とを押し寄せ、八日朝以來帝國海軍航空部隊これを猛攻中、既に撃沈破十六隻、戦艦撃沈三炎上大破一と發表せられる。

臨時報道出づ。

昭和十八年十一月九日十六時

大本營發表帝國海軍の大戦果轟きわたり、卓に倚る者をして思はず起たしむ。

日をおかず、時をゆるさず、

再びブーゲンビル島沖に硝煙立ちこめ、

敵大船團と敵大艦艇と敵航空機と

無敵海軍の強襲によりて殲滅せられんとす。

激戦未だ終らず、

今筆をとりつつある此の瞬間、

尙ほ死闘のたけなはなるを知る。

身銃後の安きに居て

この血潮したたる報道をきき、

その戦果の大に驚き、

心名状すべからず。



感謝せんか、自戒せんか、  
奮進すべきか、祈念すべきか、  
ただ一切を包む渾沌たる感激に襲はれ、  
衝動の烈しさに追はれて此の文字を綴る。

## 大決戦の日に入る

昭和十八年十一月十四日作。ブーゲンビル島沖では、十一日晝夜第三次航空戦、十三日未明第四次航空戦が戦はれ、驚くべき戦果をあげてゐるが、我方の損害もその度に必ずあるし、航空機の数量さへもつと豊富なら敵を上陸させることすら断じてなからうと焦慮せられる。敵は当面ラバウル奪還を目ざしてゐるといはれる。

心にやけついで離れない日がまた来る。

あの十二月八日の夜

暗い町を歩きながら覺悟した決意が

まる二年を経た今日いよいよ固い。

漠然と豫期した必至のことが

次から次へと嚴然たる形をとり、  
今まさに勢は急調加速の奔湍となる。  
豫期しなかつたほどの勝利と建設と、  
貴い喪失と心魂に徹するものと、  
すべてを含んでいま歴史の突端にゐる。  
敵は萬策をつくして眞劍に來る。  
所謂文明を誇稱する敵はわれらを知らず、  
ひとへにただもみつぶさうとする。  
われら大御神よりうけたみをしへのまま、  
神州の權威と品格とを堅持して

一億の民空前の戦に集中する。  
一億の民一切を神のみ前に捧げてすがしく、  
今こそ奮然として大決戦に突入する日だ。

## 第五次ブーゲンビル島沖航空戦

昭和十八年十一月十八日作。十七日未明同方海面で第五次航空戦あり、敵大型空母一隻轟沈、中型空母二隻撃沈、其他四隻撃沈と發表せられる。敵出動の執拗さは眞劍以上だ。生産陣、鑛山部隊もブーゲンビル島沖の戦以來數割の増産を示すといふ。物凄く此の戦局の重大な意味が國民に徹せぬ筈はない。

敵艦艇五たび大擧し來りて

五たびわが精銳のために葬らる。

敵暴虎馮河の勇あるに似て

わが盡忠至誠の力を知らず。

知つて尙且つ敢て來るは

實に已むを得ざるに由る。

彼等の意の儘ならざる者許し難しとは

彼等の驕慢が下す至上命令にして

大擧殺到はその國民の氣質を語る。

神國一たび意を決すれば海も干すべし。

正しきを世界に布くもの勝たざるを得ず。

軍事は統帥の帷幄にあり。

われら銃後にある者ただ力を集結して

軍の要するところを必ず満たし、

更に破天荒の強力武器を供せんのみ。

耳を傾くれば大本營發表の語氣心に迫り  
思はずわが日常の生活に恥あるを覺る。  
筆を執つて斯くの如きものを書くに堪へず、  
しかも又書かずして終らんにも堪へざるなり。

## 十二月八日三たび來る

昭和十八年十一月十九日作。六日大東亞會議は堂々たる大東亞共同宣言を可決した。  
○共存共榮の原則、○獨立親和の原則、○文化昂揚の原則、○經濟繁榮の原則、○世界進  
運貢獻の原則の五要綱である。  
此詩發表以後、敵の別機動部隊の大群がギルバート諸島に來襲。わが精銳敵の空母艦隊  
等十五隻を撃破した。

ブーゲンビル島沖の戦果大にして

世界の海戦に一期を劃す。

この時十二月八日三たび來るにあひ

人おのづからただ一事をおもふ。

かの日一日の意味のゆゑに